



東屋の雨

川崎ゆきお

公園の東屋にあるベンチでの話だ。屋根付きの休憩所のようなものだ。

雨が降っており、当然ここでは傘を差さなくてもいい。ただ、来るまでは差さないといけないだろう。

「暖かい雨ですね」

「他にありませんか」

「はあ」

「他に話題が」

「話題ねえ。話してもドラマチックなものは、もうないですなあ」

「それで、雨の話ですか」

「幸いなことにね」

「以前からそうなのですか」

「何がですか」

「興味深い話が他にあると思うのですが」

「ああ、それは色恋や欲得に耽っていた頃でしょうかねえ。そこには色々とドラマがありました」

「では、その頃のお話をしてもらえませんか」

「私ですか」

「そうです」

「話すようなことじゃないですよ。それに自慢話になります」

「しかし、雨が降っている話よりも興味深いと思われませんが」

「そうですか。私は雨が降ってるとか、暑いとか、寒いとかの話の方が好きですよ。これは平和な話ですからなあ」

「だから、雨なら水害とか、気温なら異常気象とか、そういう話になるはずなのですが」

「はず、ですか。しかし、そんな大袈裟な話じゃなく、いま降っている雨について思う方がいいのです」

「雨なんて、傘を差せば済む問題でしょ」

「いやいや、この時期、こんな暖かい雨が降っていることは、どういうことなのかを考えます」

「天気図を見れば分かるのでは」

「予報を見ても、楽しみがないでしょ」

「た、楽しむ？」

「はい、この東屋へ来るとき、雨なのか、晴れなのか、曇りなのか、家を出るとき、それが楽しみなんです」

「雨も楽しめるのですか」

「雨を経験すると、晴れがよりよく見えます。決して雨が楽しいわけじゃない。これは我慢劇で我慢している期間なのです。これで溜が出来る。すると今度晴れたとき、その晴れを見てカタルシスを覚える」

「僕には分かりません。他に難題が色々ありまして、たまにここで一人で腰掛け、考え事の続き

をやっています」

「あまり見かけませんが。私は毎日、この時間に来ています」

「ああ、今日は他の用事で、来る時間を遅えました。まあ、毎日同じ時間には来れませんよ。時間が空いたときにね」

「あ、そうですか。私はここへ来るのが日課で、他の用事は滅多に入らないので」

「ここで何をされているのですか」

「さあ、それは忘れましたが、滅多に人とご一緒はないですねえ。私が帰ってから、常連の散歩人さん達が集まるようですが」

「雨が降っているのに、わざわざ来られたのですね」

「はい、日課というか」

「他に優先すべきメインはないのですか」

「メインですか。はいお陰様で、もうそんな面倒なメインなどなくなりましたから、平和そのものですよ」

「そうですか」

「じゃ、私はこれで失礼します。長く座っていると、ここは尻が痛くなるベンチですから、いつも長くは座っていないのですよ」

老人は大きく重そうな傘を差し、東屋から離れた。

もう一人の男は目を閉じ、じっとしている。瞑想中のように。きっと心を空にするのではなく、色々なことを頭の中で整理でもしているのか、あるいはある事柄に関し、集中的に思案しているのか、それは分からない。しかし、眉間の皺が苦しそうに見える。

★

「引田の留めさんに公園で会ったよ」

帰宅した老人が夫人に語る。

「あの人、何だった」

「さあ、何だろうねえ。色々やって来た人だけど、あの東屋で座るようになりゃ、もうおしまいだね」

「あなたも早い目に引いてよかったわね」

「留めさんだけに、まだ留まっている。引き際が悪いんだねえ」

「そうですねえ」

了